第Ⅰ部

構造モデル

日本語構造伝達文法は，表層の文がなぜそのような文として現象するのかを，深層の判断構造のありさまから説明しようとする。そうすることによって，さまざまな問題に解答を与えることができると考えるからである。

第１章では，構造立体モデルに出発点を与える。

第２章では，主格に３種類あることを述べ，客格の表示法に触れる。「デアルとダ」が同一構造をもつことにも触れる。

第３章では，「は」が何であるかを説明し，「ハとガ」の違いを述べるとともに，主語に８種類のものがあり，客語に６種類のものがあることを述べる。

第４章では，構造の描写法と，「の」の扱いに触れる。

第１章

構造モデル

1.1　集合図から導く立体モデル

ここに一つの集合図がある(図1-1)。これは，「犬は動物である。」という命題を図式化したものである。ここでは「犬」が「動物」集合の元になっている。そして，このことは　{犬｜動物}　と書き表すこともできる。

しかし，この集合図の意味をよく考えてみると，これは簡略な表示法であることに気がつく。そして，簡略化される以前には，図1-2のようなものが存在しなければならないはずであることに思い至る。

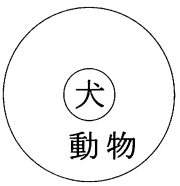


図1-1

図1-2

「犬」「鳥」「羊」「猫」「猿」「馬」「狐」「虎」「人間」……。こういう「動物」といわれるものすべてがこの集合の元になっていて，本当はすべての「動物」をここに集めなければ図は完成しないはずのものである。しかし，だからといって，それらの元を全部図の中に書き込まなければならないというのでは不便このうえない。そこで，図1-1のような便法がとられるわけである。私たちが昔から親しんできた図は，実は簡略図だったのである。

ところで，図1-2において，「犬」「鳥」「羊」……が集合の元として取り上げられているのはなぜかといえば，それはいうまでもなく，属性が同じと見な

されているからである。それではその同じと見なされている属性とは，ここでは何なのか。それはすでに明らかであって，それを問い直すのはくどいと言われるかもしれない。「動物」であることは自明のことではないか。

しかし，本当にそうなのだろうか。実は違うのではないか。ここでは属性は「動物」ではなくて，「動物である」なのではないだろうか。「動物」という属性ではなくて，「動物である」という属性を持つものの集合を表したものが図1-1であり，図1-2であるのではないだろうか。属性は述語の形になっていなければならないのではないか。

そこで，『現代論理学入門』(P. 116)にあたってみると，たしかに私たちの「動物」にあたるもの(人間)は「述語を表す」とある。

> 述語論理学では「人間」と「動物」の［略］関係を表すのに
> 　動物(人間)
> と表示する。そしてこれを記号化して
> 　Ｆ(ａ)　または(　)を省略して　Ｆａ
> というように書く。こうすれば‘ａ’の位置にくる語(名詞，代名詞等)は主語を，‘Ｆ’の位置にくる語(名詞，形容詞，動詞等)は述語を表すことになる。
>
> (［略］と下線は引用者による。)

それで，私たちは属性を，「動物である」という述語本来の形で表すことにして，図1-1，図1-2を図1-3の形で表現することにする。

これで，「犬」が「動物である」という属性をもつものの集合の元であることがより適切に表示できたことになる。

図1-3

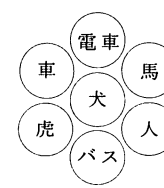


図1-4

それでは，図1-4は何を表していることになるのだろうか。図1-4には「走る」という属性を持つものが集められている。したがって，図1-4は「犬は

走る。」「虎は走る。」「バスは走る。」……という命題を図式化したものであることになる。そして，この図を簡略表示すると，図1-5のようになる。

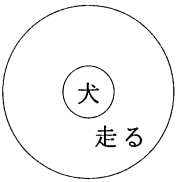


図1-5

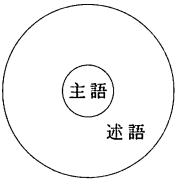


図1-6

私たちは「犬は動物である。」「犬は走る。」という命題を図式化する方法を確認したわけだが，実は，ここに一つ問題がある。なぜ「犬は」のように「は」が入るのか，という問題である。図のどこにも「は」はない。「は」を入れて読むのは許されるのか，という問題である。そもそも「は」とはいったい何なのだろうか。

「は」の性格を考えることはひとまずおいて(3.1 相対化描写 参照)，私たちは上の命題図を読むときには「は」を入れないことにしよう。すなわち，

「犬 動物である。」　　「犬 走る。」

と読むのである。

人間の基本的な判断は，「あるもの」(例：犬)と「その属性」(例：動物である)とを結び付けることによって成立する。つまり，主語と述語を結び付けることによって成立する。とすれば，判断は基本的に図1-6のように表示できるわけである。この図の意味するところは，こうである。

「『主語』は，『述語』を属性に持つものの集合の元である。」

そして，その読み方は「『主語』『述語』」となる。

ところで，「犬」の属性は「動物である」ばかりではなく，「走る」「吠える」「鳴く」「かむ」……等，多数ある。このことを一挙に図示するために，図を立体化することにする(図1-7)。

この立体図においては，中心の軸が主語である「犬」を表し，それぞれの円盤が属性(述語)を表している。

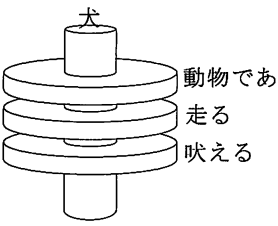


図1-7

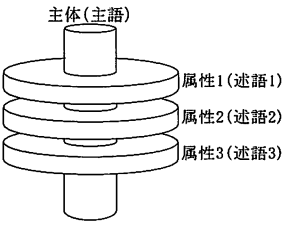


図1-8

このような(あるいはさらに複雑な)モデルで表される判断の形が，意識より深いところ(深層)に，状況を写して絶え間なく生じている。それらのうちのいくつかのものは意識に反映される。意識に反映されると，私たちはその判断の形を「ことば」を用いて「描写」し，明確な判断へと固定化・意識化する。

「ことば」といえば，ここで述べておかなければならないことがある。それは，深層の判断の形をモデルで表すときには，便宜上「犬」とか「走る」とかという語を添えているが，本当は，深層には「犬」「走る」などという「語」はない，ということである。深層にあるのは，その表象だけである。「犬」と呼ばれる動物に対する「犬」という「名称」は一つの属性にすぎない。私たちは「犬」を表象として直観できたとしても，それを何と呼ぶか本当は知らない。

深層では，表象だけの組み合わせで判断構造が形成される。ことばをもつ人間である私たちは，意識の層［表層］にある「ことば」を使ってこの判断構造を描写して，自己の意識の世界へ投影したり，他者に伝達したりする。

もちろん，そのときに使う「ことば」は，「知っていることば」である。日本語を知っていれば，「犬 走る。」となるであろうし，英語を知っていれば，“A dog runs.”となるであろう。十分には知らないことばでいくら描写しようとしても，深層に表象の組み合わせの成立を感じる一方で，表層ではもどかしい思いをするだけとなる。

ここで用語の整理をしておきたい。「主語」「述語」という用語は「ことばレベル(表層)」でのみ用いることにし，これに対応する「判断レベル(深

層)」の用語は，「主体」「属性」ということにする。したがって，図1-7に示した，深層レベルに設定される判断の構造における中心の軸は「主体」であり，円盤は「属性」である。この立体を「ことば」で描写したときにはそれらが，それぞれ「主語」，「述語」になる*1(図1-8)。

1.2　主体，客体はともに実体

「犬 動物である。」を図示することはできた。しかし，よく考えてみると，「動物」もまた「犬」と同様，「主体」になりうる。「犬」と同じく「動物」もまた，たとえば次の例のように「属性」をもっている。

「動物 動く。」「動物 食べる。」「動物 休む。」

であるならば，図1-9のように，「動物」も「犬」と同様，円柱で表すべきではないだろうか。

とすれば，「動物である」全体を一つの属性として取り扱うのは無理だということになる。そこで，これを分解してみると，「動物／で／ある」のように，さしあたり三つの部分に分けることができる。

一方，「犬 走る。」の図示には問題がない。それは，「走る」という属性は(今のところ)それ以上分解できない単一の要素であるからである。

そこで，「動物である」の場合は，「走る」と同じように，(今のところ)それ以上分解できない「ある」の部分だけを属性とすることにする(図1-10)。

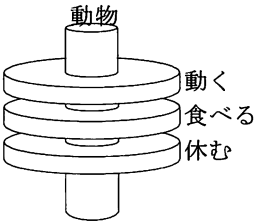


図1-9

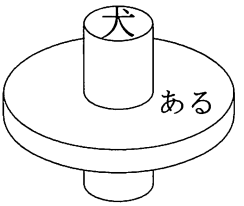


図1-10　「犬 ある。」

*1　主体はさまざまな属性の集合体であり，属性はさまざまな主体の集合体である，といえる。

しかし，これでは，犬の「存在」は言えたとしても，それだけである。どう存在するのかを言うことができない。

その存在のしかたを「動物 で」が補っている。「動物」は「犬」同様，円柱で表すことになった。とすれば，図1-11のような形を考えることができる。

「で」は，属性「ある」をより詳しくするために，円柱「動物」を属性に結びつける機能を担っている。これについてはすぐ「格」のところで述べる。

図1-11では，「動物」は円盤の中心にはない。円盤の中心にあれば「主体」と呼べるのだが，これは違う。それで，このように属性を補助するような役割で，半分だけ関わった形で円盤の周辺に位置した円柱を「客体」と呼ぶことにする。そして，「主体」「客体」の両者を共に「実体」と呼ぶことにする。表層の言語形式ではそれぞれ「主語」「客語」「実詞語」と呼ぶことになる(図1-12)。(5.1「詞」と「語」参照)

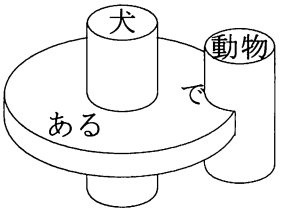


図1-11

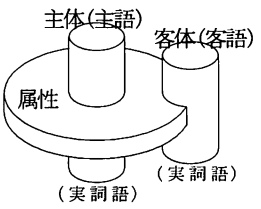


図1-12

表1-1　　実体と実詞(語)

(深層) 構造レベル		(表層) 言語形式レベル	
実体	主体	主語	実詞(語)
	客体	客語	

第２章

格・表示法

2.1　格

実体はある属性に対して，主体となるか客体となるかのいずれかである。円盤の中心に立つか，周辺に立つかのどちらかである。これらのあり方を「格関係にある」という。構造意味的に言えば，「格」とは「実体と属性の論理関係」である。

実体には主体としてのあり方と，客体としてのあり方があるので，格には主格と客格の２種類が生まれる。そして，それらの格は表層のことばレベルでは「が」，「を」，「に」，「で」などの「格詞」で表現される。

2.2　主格……３種類の主格

「主体」と「属性」の結びつきに際して生じる論理関係が「主格」である。すなわち，その主体がそこに現れた属性の持ち主である，という関係で両者が結びつく格である。

主体と属性が結びつく際には，主体と属性のどちらが先に設定されるか(どちらが論理的に先に決定されるか)という，設定の先後関係が生じる。

この設定の先後関係のあり方が３通りあることから，主格には３種類のもの……「$\emptyset_1$格」,「$が_1$格」,「$が_2$格」……が認められる。これらは同じ位置にあるので「同位格」と呼ぶことにする。

「$\emptyset_1$格」を「第１主格」，「$が_1$格」を「第２主格」，「$が_2$格」を「第３主格」と呼ぶことにし，それぞれの構造上の特徴を図で示せば次のようになる。

1) **第１主格(∅₁格)**……主体の設定が属性の設定に先立つ格

主体のもつ多様な属性から一つを選び出す判断での格。

その主体そのものに関心があって，その主体について述べる。

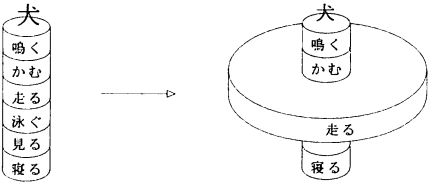


図2-1　　犬 ∅₁走る。

2) **第２主格(が₁格)**……主体の設定が属性の設定と同時である格

主体と属性がはじめから結びついている判断での格。

主体と属性の結びつきそのものに関心があり，状況について述べる。

（眼前描写，従属節形成）

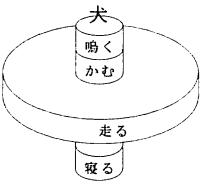


図2-2　ほら，犬が₁走る。／犬が₁走るのが₁見える。

3) **第３主格(が₂格)**……主体の設定が属性の設定より遅れる格

属性を構成する多様な主体から一つを選び出す判断での格。

まず属性の方が決定されて，後から主体が選択決定される。

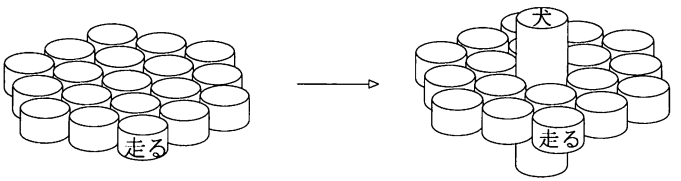


図2-3（例：何が走るか，という問いに対する回答）犬が₂走る。

上の 1)の第１主格を示す役割を担う表層形式(語)を現代日本語は所有していない。「が」ではないし，ましてや「は」でもない。古代語においても

認められない*1。歴史的に一貫して，なかった。形式のないものが機能を担ってきた。いわば透明人間が無数にいたわけである。これでは扱いにくいので，透明人間に包帯を巻いてその存在を把握しやすくするように，第1主格にはØ（ゼロ）という着物を着せることにする。Ø は主格のほかにも導入することになるので，主格の場合には特に「$Ø_1$（ゼロイチ）」という形にする。

2.3　客格

「客体」と「属性」の結びつきに際して生じる論理関係が「客格」である。客格の論理関係のあり方は多様である。すなわち，客体が「属性の手段」を表す関係，「材料」を表す関係，「到達点」「相手」「期間」を表す関係，等々，実にさまざまである。

日本語ではこのさまざまな論理関係が次の９種の格表示形態のいずれかに分担収納されている。……に，で，と，を，へ，から，より，まで，$Ø_2$

（「$Ø_2$」については2.7参照。「の」は格を示さない……4.2の3）参照。）

たとえば『大辞林』を引いてみると，「を」に収納されている格には次のようなものがある。（例文は簡略化，(6)以降は省略）

(1) 動作・作用の対象を表す。「本を読む」「講演を終わる」

(2) 使役表現において動作の主体を表す。「子供を泣かせる」「花を咲かせる」

(3) 移動性の動作の経過する場所を表す。「いつもの道を通る」「大空を飛ぶ」

(4) 動作・作用の行われる時間・期間を表す。「一年を無事に生きてきた」

(5) 動作の出発点・分離点を表す。「家を出る」「バスを降りる」

格表示形態「を」は，少なくとも５つの異なる格を表示していることがわ

＊1　『岩波古語辞典』p.1487 には「元来，古代日本語では，動き・状態の主体を表わす格（主格）を明示する格助詞は存在しなかった。」とあり，「が」が「室町時代以後，本来の日本語になかった主格の助詞としてはたらくようになった。」とある。

また，『日本語文法新論』p.23 には「主格の標識は，もとゼロ形態であった」とあり，現在でも「俗語では」ゼロ形態となる，とある。

しかし，日本語構造伝達文法では，現代語でも，第1主格には標識が「正式に」「ない」という立場をとる。（モンゴル語等，同じことがいえる言語も多い。）

かる。このように，一つの格表示形態で表示される異なる格を「同名格」と呼ぶことにすれば，「を」には少なくとも５つの同名格が存在することになる。

同名格のあり方は，言語によって異なっている。タガログ語では，sa という一つの格表示形態(前置詞)がきわめて多くの同名格(英語の in, to, into, for, on, from, through, at 等々に相当する格)を収納しているという。このためタガログ語を母語とする人は，英語の格表示形態(前置詞)を使い分けるのが苦手であるという(“Basic Tagalog” pp.73-74)。

それでは，いったいいくつの客格があるのだろうか。……客格の数は厳密に言えば，客体をとる属性の数だけあることになる。その数は何万になるか分からない。ともかく膨大な数に上るであろう。そのままではとても扱いきれるものではない。しかし，類似した格をまとめていけば，たとえば 1,000 とか，100とか，50とかと，扱いやすい数にまとめることができるはずである。すべての格を体系的に網羅する方法が確立し，100種類ぐらいにまとめることができれば理想的なのであるが，これは今後の課題である。

現段階では，客格はとりあえず，便宜的に「を格」「に格」などと呼んで扱うことにする。構造モデル上では，図2-4,-5のように属性の盤の周辺に40度おきに「位置」で表示する。

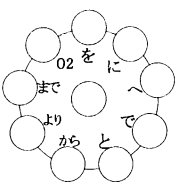


図2-4

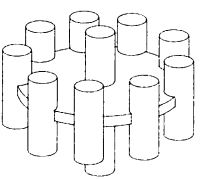


図2-5

2.4　単文モデル

以上から，たとえば「吉田Ø1バスで大学に行く。」という単文は，図2-6,-7のようにモデル化できる。

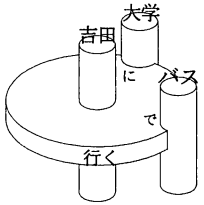


図2-6

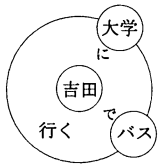


図2-7

2.5　構造簡略表示

今後構造が複雑になると，構造を一つひとつこのような図で表示するのは，非常に面倒なことになる。そこで簡略に表示することを考えておきたい。構造モデルを横から見て，必要最小限の線で表示することにする(図2-8)。

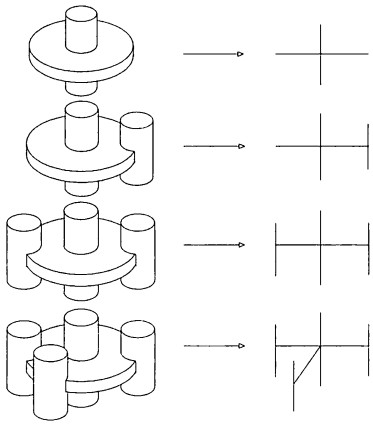


図2-8

簡略表示では，水平線が属性を示し，垂直線が実体を示す。垂直線(実体)のうちで，水平線(属性)と十字をなして交差しているものは主体を示し，横倒れのT字をなして接しているものは客体を示す。

格は交点あるいは接点のところに仮名かローマ字で表示しておく(図2-9)。(将来は，格を番号で表示できるようになるだろう。)

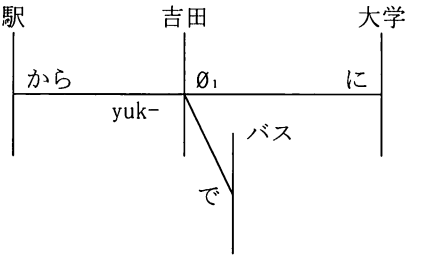


図2-9

2.6　属性名表示

ここで属性の名称について考えてみたい。図2-6,-7 では，属性を「ゆく(いく)」と読んだが，「ゆく」はいわゆる語幹と語尾という複数の要素を含んでいる。これをローマ字(音韻表記)で示せば，yuk-u となる。語尾 -u は，構造をことばで描写する際に(つまり表層化する過程で)付加される要素であって，構造レベルには属していない。表現内容に対する話し手の描写態度を表す機能をもっている(この機能を担う詞を「描写詞」あるいは「変換詞」と呼ぶことにする)。したがって，-u を除いた yuk- だけが属性の盤の名称として適当であることになる。

そこで，属性は，図2-9 における yuk- のように，語幹だけをその名称とすることにする。

2.7　Ø2格

Ø2格について考えたい。たとえば，

そこへしばしば行く。

という文の中の「しばしば」という実体は yuk- という動属性に対して何格で関係しているのであろうか(図2-10)。意味的には「たまに・まれに」などと同じく頻度を表している。「たまに・まれに」は「に格」にある。この「に格」を「に格」のうちの頻度を表す格と考えれば，「しばしばに」という表現があってもよさそうであるが，

*そこへしばしばに行く

という言い方はない。つまり，「しばしば」は「に格」にはない。

また，「を・へ・で・と・から」等，ほかの格も考えられない。音に聞こえる形での格詞はないように思われる。ということは，機能だけあって音形式のない格だということになる。

機能だけあって音形式のない格といえば，第１主格(Ø₁格・ゼロイチ格)もそうであった(2.2)。そこで，第１主格にならって，この格を「Ø₂(ゼロニ)格」と呼び，この形式「Ø₂」を格詞とすることにする。Ø₁格は主格であるが，Ø₂格は客格である。構造は図2-11のようになる。

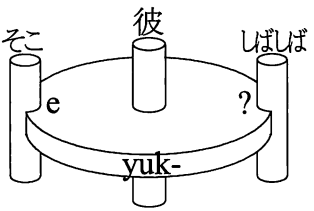


図2-10

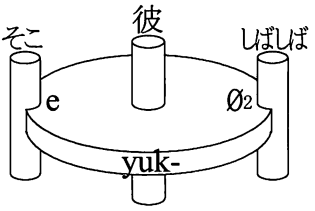


図2-11　しばしばØ₂行く

ふつう，「来年・来月・来週・あす・きのう・おととい」等，発話時点(現在)を基準点とする時を表す実体は「に格」に置かないから，

*あすに田中さんと会います。

とは言わない。本文法ではそのような実体は「Ø₂格」に置かれたものと考える。

あすØ₂田中さんと会います。

国語教科文法では，この例のような「あす」は，名詞が副詞的に使用されたものとして扱うが，本文法では，名詞(実体)が「Ø₂格」に置かれたものとして扱う。本文法にはそもそも副詞というものがない。

この「Ø₂格」には，たとえば「を格」に多様な格が収納されている(2.3)ように，「頻度を示す格」「現在と関連づけられた時を示す格」など，いくつかの格が収納されている。

2.8　格を示す３種類の「Ø」

ところで，格詞がない形で発話されたものでも，

ボクØ₁本＿読む。　→　ボクØ₁本を読む。

のように，格詞が容易に復元でき，明らかに格詞の省略と考えられる場合がある。このような場合に，格詞が省略されていることを表すのに「Ø」を使用する[*1]。

ボクØ₁本 Ø 読む。

そして，何格の省略であるのかを明示するために，格詞を添えておくこともある。

ボクØ₁本 Øを 読む。　／　ボクØ₁本 Øo 読む。

したがって，格を表示する場合の「Ø」には３種類のものがあることになる。

「Ø₁」……ゼロイチ格・第１主格

「Ø₂」……ゼロニ格

「Ø」「Øに」「Øe」……格詞省略(格不描写)

2.9 「である」と「だ」の違い

「犬Ø₁動物である」の構造は明らかになった(図2-12,-13，図1-11参照)。

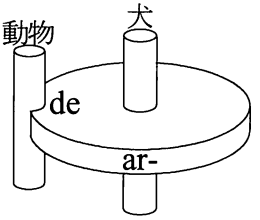


図2-12　犬Ø₁動物である

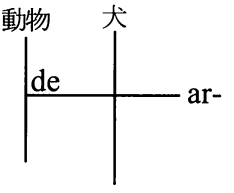


図2-13

では，「犬Ø₁動物だ」の構造はどうなのであろうか。

＊1　「格詞の省略」というのは，別の言い方をすれば，構造上での実体の位置を表層文に明示しないことと言える。格(構造上，その実体の存在している対属性的位置)を表層に描写しないこと(格不描写)，とも言える。

これは実は同じ構造なのである。「である」を要素に分解すれば de ar-u となるように，「だ」を要素に分解すれば d a-Ø となる。この近似は「であろう」と「だろう」を比較すればさらに明瞭になる。

de ar-u	de ar-oo
d a -Øu	d ar-oo

(-u および -oo は描写詞なので，構造に直接関係がない。)

あたかも一つの要素として意識されている「だ」の中には，実は，格表示形態「d」と，属性「a(r)-」，さらにゼロ化された描写詞「-u」が構成要素として入っている。(「だ」はだから，「格内蔵動詞」とでも呼んだ方が機能をうまく言い当てることになる。国語文法では「助動詞」となっているが……。)

同一の構造を「である」と描写したり，「だ」と描写したりしている。同一の構造に異なる描写法を適用しているのである。

「である」「だ」についてはさらに「第11章 断定基」で述べる。そこでは「です」「であります」「でございます」も扱う。

主格には３種類のものがある？　→　p. 10
本当の主格は助詞では表せない？　→　p. 11
「私が話す」の「が」は奈良時代にはなかった？　→　p. 12
「あす会う」の「あす」って，名詞？ 副詞？　→　p. 16
「私は」の「は」って「ふちどり」？　→　p. 20
主語は８種類にも区別できる？　→　p. 23
文を名詞化するのはなぜ？　→　p. 51

第３章

相対化描写と主語・客語

3.1　相対化描写……「は」

「は」は国語教科文法では(副助詞の中の)係助詞として分類されている。係助詞にはほかに「も・こそ・さえ・だけ・しか・でも・だって」等がある。

係助詞のもつ基本的な機能は，構造伝達文法の観点からとらえると，構造上のある実体を他の潜在的な実体と相対的に関連させて描写することにある。そこで，この機能，この描写法を「相対化描写」と呼び，係助詞を「相対化描写詞」と呼ぶことにする。相対化描写詞には①～③の３種類のものがある。

①「相対化描写１」(他実体随伴描写)……基本的に，その属性に対する主体(あるいは客体)が，この判断構造に現れた主体(客体)だけでなく，ほかにもあることを含意しつつ判断構造を描写する。「も・さえ・でも・だって」がこれにあたる。ニュアンスの違いは別に扱う必要がある。

彼~~が~~も hasir-u

(相対化描写では，格を描写しない傾向が強い。描写されない格の格詞は取り消し線＝を加えて表示する。)

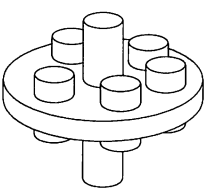


図3-1

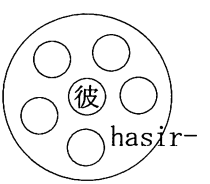


図3-2

彼~~が~~も hasir-u ……走る人は彼だけでなく，ほかにもいることを含意。

②「相対化描写２」（実体排除描写）

②-1　**他実体排除描写**……その属性に対する主体(客体)が，その判断構造に現れた主体(客体)だけであり，ほかにはないということを含意しつつ判断構造を描写する。主体の場合，属性を形成する主体集合の元がその主体一つだけであることを示す。「こそ・だけ」や,「彼さえ来れば……」のように一部の「さえ」がこれにあたる(35.2)。

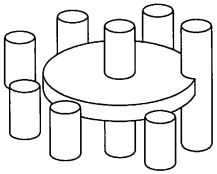


図3-3

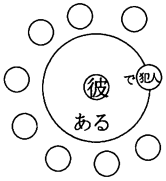


図3-4

彼がこそ犯人で ar-u
彼こそが犯人で ar-u　……犯人であるのは彼のみであることを含意。

②-2　**自実体排除描写**……その属性に対する主体(客体)が複数あり，その中にその主体(客体)自身が含まれないことを含意しつつ描写する。「彼しか来ない」の「しか」がこの機能をもつ。否定構造において用いられるので否定の部で扱う(35.2)。

③「相対化描写３」（実体ふちどり描写）……実体に赤いリボンを巻き付けてふちどりをすることにより，その実体をきわだたせる。(赤いリボンは「輪」でもよい。スポットライトをあてることでもよい。)

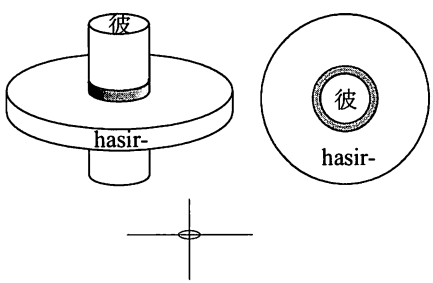


図3-5　彼$\emptyset_1$は hasir-u

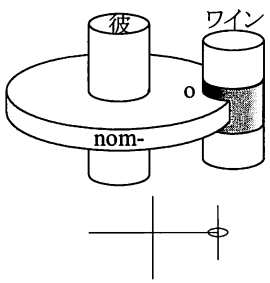


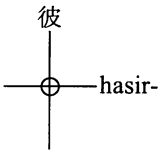
図3-6　**ワイン**を**は飲む**(客格での例)

赤いリボンは万里の長城にたとえることができる。万里の長城で国境をふちどりすることにより中国という世界を夷狄の世界から「区別」し，同時に，中国内部の文化を守り，「強調」する。

このふちどり描写により，その属性に対する主体(客体)が他の潜在的な主体(客体)から「区別」され，同時に，主体(客体)であるものはまさにその主体(客体)そのものであることが「強調」される。

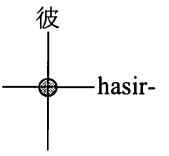
ふちどりの内部に比重がある場合は表層文レベルで「主題」となり，ふちどりの外部に比重がある場合は表層文レベルで「対比」となる。この実体ふちどり描写に用いられるのがまさに「は」である。

「は」は簡略表示では○を使用する(図3-7)が，特に内部に比重がある場合には●を使用することもある(図3-8)。しかし，「は」は構造形成には直接関わらない「描写詞」(5.2参照)であるから，特に必要がない場合には構造上に図示しなくともよい(図3-9)。当然のことではあるが，構造上に図示がなくとも，「は」描写はできる。



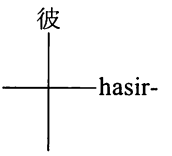
主題・対比
彼$Ø_1$はhasir-

図3-7



主題
彼$Ø_1$はhasir-

図3-8



主題・対比
彼$Ø_1$はhasir-

図3-9

「は」……とは，実体に巻き付ける赤いリボン(輪・スポットライト)である。主体にも客体にも巻き付けることができる。巻き付けることによってその実体をきわだたせ，表層レベルで主題化・対比を行うことができる。

④「複合相対化描写」というのもある……「こそ＋は」である。図は相対化描写２と３の合成となる。

彼$Ø_1$こそは犯人である。

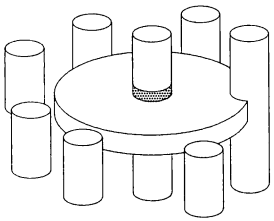


図3-10　彼$\emptyset_1$こそは犯人である。

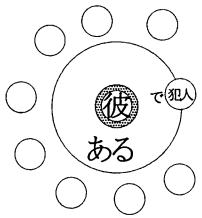


図3-11

3.2　基本構造モデル

上には相対化描写される実体が主として主体である場合の構造を示したが，図3-6のように，客体である場合にももちろん可能である。

そこで，相対化描写を主体，客体の両者において表現すれば，基本構造モデルは図3-12のようになる。

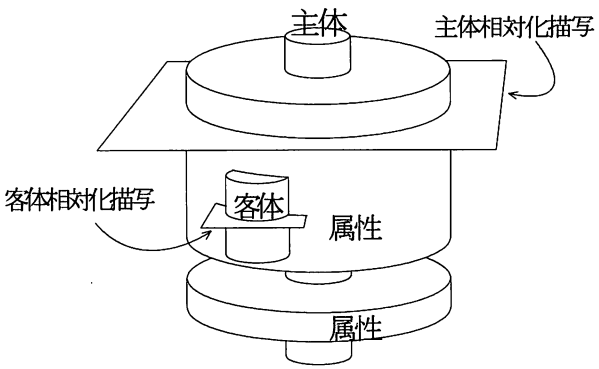


図3-12

3.3 「は」と「が」の違い

主語を提示する場合の「は」と「が」の違いは何か，と問われることが多い。しかし，これでは問題の設定が間違っている。比較しなければならないのは，「$\emptyset_1$」と「が」である。この両者に「は」が作用するのである。

表層に現れると「は」と「が」二者の違いと見えるものでも，構造と描写の関係から考えれば，表3-1 のように，少なくとも５つの異なる場合がある。

「$Ø_1$・が」と「は」　　表3-1

	格	は	主語の実現形式		機　　能
1	$Ø_1$	ナシ	～ $Ø_1$	ナシ	主語について述べる。
2		は	～ $Ø_1$は	は	主語について述べる。主題・対比。
3	$が_1$	ナシ	～ $が_1$	が	事実提示。従属節内主語。
4		は	～ ~~が~~は	は	事実活写提示。従属節内主語。
5	$が_2$	ナシ	～ $が_2$	が	質問への回答など。

主語で「は」が生じるのは，「～ $Ø_1$は」か「～ ~~が~~は」のいずれかの形式においてである。

3.4　８種類の主語

主語の実現形式を形式別に扱うと表3-1 のように５種類になるのであるが，機能という点から見ると，２番は「主題」と「対比」という異なる機能を含んでおり，３番は「事象話題」となることもあり，また，４番も「事象主題」と「事象対比」という異なる機能を含んでいる。これらを１つずつ数えると８種類の主語形式が得られることになる。表3-2のとおりである。

８種類の主語（１）　　表3-2

	格	は	主語の実現形式		主語の種類	例　文
①	$Ø_1$	ナシ	～ $Ø_1$	ナシ	話題主語	あの鐘，鳴る。
②		は	～ $Ø_1$は	は（内部重点）	主題主語	あの鐘は鳴る。
③				は（外部重点）	対比主語	あの鐘は鳴る。
④	$が_1$	ナシ	～ $が_1$	が	事象主語	鐘が鳴ってる。
⑤			～ ~~が~~	ナシ	事象話題主語	鐘，鳴ってる。
⑥		は	～ ~~が~~は	は（内部重点）	事象主題主語	鐘は鳴ってる。
⑦				は（外部重点）	事象対比主語	鐘は鳴ってる。
⑧	$が_2$	ナシ	～ $が_2$	が	選択主語	あの鐘が鳴る。

この８種類それぞれの主語について検討してみたい。

① 話題主語「～ $\emptyset_1$」……その主体について口語的に述べる

犬$\emptyset_1$いる。　彼$\emptyset_1$歌ってる。　彼女$\emptyset_1$来る。　鐘$\emptyset_1$鳴る。

この主語形式は主体について述べる機能をもつ。日本語本来の主語表示形式であるが，現在では口語的である。②の「主題主語」に対して，これを「話題主語」と名づける。ポーズを伴うことが多い。

私，大学生です。

② 主題主語「～ $\emptyset_1$は」……その主体について述べる

犬$\emptyset_1$はいる。　彼$\emptyset_1$は歌っている。　彼女$\emptyset_1$は来る。　鐘$\emptyset_1$は鳴る。

やはり，主体について述べる機能をもつ。主体が「は」によってふちどりされるが，この場合は③の場合と異なり，ふちどりの内部に比重がある(3.1③)。それで，主体そのものについて関心が高く，その主体を主題とする結果になる。書き言葉の主語や，改まった発話の主語はこの形式をとる。話し言葉では，ともすると，ことさらに取り立てた感じになってしまうことがある。

ねえ，ちょっと。鈴木さん＿いる？　(①)

ねえ，ちょっと。鈴木さんはいる？　(②)

③ 対比主語「～ $\emptyset_1$は」……他の主体との対比でその主体について述べる

犬$\emptyset_1$はいる。　彼$\emptyset_1$は歌ってる。　彼女$\emptyset_1$は来る。　鐘$\emptyset_1$は鳴る。

やはり，主体について述べる。主体が「は」によってふちどりされるが，②の場合に比べ，ふちどりの外部に比重がある。他の同類の主体の存在を強く意識し，他の主体と比較する気持ちで主体を主題化する。この対比の「は」は卓立をもつ(強くはっきり発音される)ことが多い(ゴシック表示)。

彼女は来る。だけど，彼は来ない。

④ 事象主語「～ が$_1$」……その出来事について述べる

犬が$_1$いる。　彼が$_1$歌ってる。　彼女が$_1$来る。　鐘が$_1$鳴る。

出来事について述べる場合の，出来事の主体を示す形式である。また，従

属節内での主語の形式でもある。

床が揺れている。　／　彼女が来ることを知らなかった。

⑤ 事象話題主語「～ ~~が~~」……出来事について話題主語で述べる

犬~~が~~いる。　彼~~が~~歌ってる。　彼女~~が~~来る。　鐘~~が~~鳴る。

主体を取り立てながら出来事について述べる。ポーズを伴うことが多い。

あ，床，揺れてる。

⑥ 事象主題主語「～ ~~が~~は」……出来事について主題主語で述べる

（犬~~が~~はいる。　彼~~が~~は歌ってる。　彼女~~が~~は来る。）　鐘~~が~~は鳴る。

やはり，出来事について述べるが，主体において「は」によるふちどりがなされ，ふちどりの内部に比重がある。このふちどりは出来事を主題化するためのものであり，主体の主題化でない点で②の主題主語と異なる。出来事を主題化するので，出来事を際立たせる効果がある。

たがために鐘~~が~~は鳴る

雨~~が~~は降る降る　城ヶ島の磯に　（「城ヶ島の雨」の歌詞の一部）

それから30年後の1949年に新制大学としてA大学~~が~~は設立された。

のような場合である。「は」をはずせば出来事を述べる形(④)になる。

⑦ 事象対比主語「～ ~~が~~は」……出来事について対比主語で述べる

犬~~が~~はいる。　彼~~が~~は歌ってる。　彼女~~が~~は来る。　鐘~~が~~は鳴る。

やはり，出来事について述べるが，「は」のふちどりの外部に比重がある。他の出来事と対比させつつ，その出来事について述べることになる。

子ども~~が~~は泣くし，客~~が~~は来るしで，たいへんだった。

水~~が~~は清く，鳥~~が~~は歌い，雲~~が~~は流れる。

「は」をはずせば出来事を述べる形(④)になる。

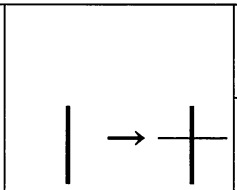
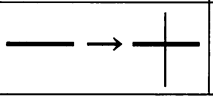
⑧ 選択主語「～ が$_2$」……先決の述語に主語を選んで補う

犬が$_2$いる。　彼が$_2$歌ってる。　彼女が$_2$来る。　鐘が$_2$鳴る。

第３主格であるから，属性の設定が先で，主体の設定が後になる。たとえば，「何がいるか」という問いに答える場合など，「犬が$_2$いる」のように主語を選択して補う形になる。この格では「は」によるふちどりは行われない。

以上，①～⑧の主語の種類を構造図を添えて表にすれば，表3-3となる。

８種類の主語（２）　　表3-3

No.	主格形式		主語の種類	例文
①	∅$_1$		話題主語	あの鐘，鳴る。
②			主題主語	あの鐘は鳴る。
③			対比主語	あの鐘は鳴る。
④	が$_1$		事象主語	鐘が鳴ってる。
⑤			事象話題主語	鐘，鳴ってる。
⑥			事象主題主語	鐘は鳴ってる。
⑦			事象対比主語	鐘は鳴ってる。
⑧	が$_2$		選択主語	あの鐘が鳴る。

（構造図については第27章〈否定の場合〉での説明も参照）

事象対比主語の場合の「は」は「○」に代えて「◎」を使用してもよい。

①～③では主体を太線で，⑧では属性を太線で示してある。⑤～⑦が①～

③と異なるのは，主体ではなく事象が話題・主題・対比になっている点である。

なお，次のように一文に話題や主題が２つ存在することもある(27-②)。この場合は，話者の意識に応じて，一方を副とする。

彼女Ø₁ 頭~~が~~ いいね。　（一方を話題，他方を副話題とする。）

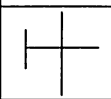
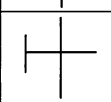
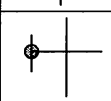
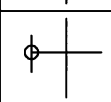
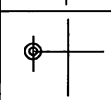
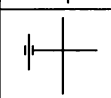
彼女Ø₁は 頭~~が~~は いいね。　（一方を主題，他方を副主題とする。）

（もちろん，２番目が対比である場合もある。）

3.5　６種類の客語

主語の場合にならって，客語の種類を「は」との関連で考えてみる。まず，ありうる６種類の客格形式を表にしてみた(表3-4)。客格の例として「を格」をとりあげてある。客格では⑪～⑯のように，番号を10番台にしてある。

６種類の客語　　表3-4

No.	客格形式	客語の種類	形式	例　　文
⑪		論理客語	を	彼，これを読む
⑫		話題客語	~~を~~	彼，これ，読む／これ，彼，読む
⑬		主題客語	~~を~~は	彼，これは読む／これは彼，読む
⑭		対比客語	~~を~~は	彼，これは読む(新聞は読まない)
⑮		事象対比客語	~~を~~は	彼，これは読む(宿題はやらない)
⑯		選択客語	を	彼，これを読む(←どれを読む？)

（構造図については第27，28章〈否定の場合〉での説明も参照）

主格の場合は，主体と属性の設定順というものがあり，大きく「$\emptyset_1$・が$_1$・が$_2$」の３種類の主格に分類できた。しかし，客格の場合はそのようなことはなく，たとえば「を」格なら，すべて「を」格の同名格(2.3)として扱うことになる。

また，客格では，主体と属性の設定順が関係しないので，話題と事象話題とを，主題と事象主題とを，それぞれ区別する必要がなくなる。このため，主語が８種類あるのに対して，客語は６種類ですむことになる。

⑪ 論理客語「～を」……論理関係を述べる

本を読む。　大学に行く。　筆で書く。　彼女と話す。

客体を特に取り立てたりせずに，事象そのものを論理関係だけで描写する場合の客語形式である。

⑫ 話題客語「～を」……その客体を取り立てて述べる

本を読む。　大学に行く。（筆で書く。　彼女と話す。）

その客体を口語的に取り立てて述べるときは，格詞を省略する。省略できない格詞の場合は⑪と同じになるので，話題客語にはなりにくい。話題客語はポーズを伴うことが多い。取り立ての意識は⑬の主題客語ほど強くない。

体重，毎日計ってます。

なお，次のような形で強調構文を描写したものは，構造は異なっているが，やはり話題客語である(37.5参照)。（ただし，③の主題主語にはならない。）（ここに使用されている「の」は強調構文の「の」であって，「のだ基(37.1)」形成の「の」ではないことに注意。）

田中さんに，きのう会ったの。（きのう会ったのは田中さんだ。）

体重を？　毎日計ってるの。　（毎日計ってるのは体重？）

筆に？　彼が書くの。　（彼が書くのは筆で？）

⑬ 主題客語「～をは」……その客体を取り立てて述べる

本をは読む。　大学(に)は行く。　筆(で)は書く。　彼女(と)は話す。

その客体を取り立てて主題にして述べる。「は」をつけ，省略できる格詞は省略する。

体重をは毎日計ってます。

この筆(で)はいい字が書ける。

その格詞を省略すると格が不明確になる場合にはふつう格詞を省略しない。

ソウルからは，彼ø1，きのう帰った。

⑭ 対比客語「～をは」……他の客体との対比で述べる

本をは読む。　大学(に)は行く。　筆(で)は書く。　彼女(と)は話す。

その客体を他の同類の客体と対比させつつ主題として述べる。

この本をは彼が読むが，あの本をは彼女が読む。

この筆(で)はいい字が書ける。　（ほかの筆ではそうはいかない。）

ソウルからは，彼がきのう帰った。（プサンからは彼女が帰った。）

⑮ 事象対比客語「～をは」……他の出来事との対比で出来事について述べる

本をは読む。　大学(に)は行く。　筆(で)は書く。　彼女(と)は話す。

⑭では他の客体との対比を行うが，⑮では他の出来事との対比を行う。

彼ø1は本をは読む。（だけど，テニスはしない。）

大学(に)は行く。（しかし，勉強はしない。）

⑯ 選択客語「～を」……客体を，選択されたものとして述べる

本を読む。　大学に行く。　筆で書く。　彼女と話す。

「何を読むか」と問われた場合の回答などでは「を読む」の部分がすでに決まっている。その客語を補う形での発話となる。

ボク，北京に行く。（←どこに行くの？）

私は筆で書く。（←何で書く？）

3.6　描写法の組合せ

８種類の主語形式と６種類の客語形式があるわけだが，実際の文では，これらが組み合わされて使用される。以下にいくつかの例を示す。

①⑫　　彼，会社，やめるんだって。
　話題主語　話題客語

②⑭⑭　　彼女は　フランス語は話すけど，スペイン語は話さない。
　主題主語　対比客語　　対比客語

②⑮⑮　　彼女は　フランス語は話すけど，ワインのことはよく知らない。
　主題主語 事象対比客語　　事象対比客語

③③　　彼はすぐ切れるけど，彼女は辛抱強い。
　対比主語　　対比主語

④⑪　　私にいい考えがある。
　論理客語 事象主語

⑤⑪　　あ，ヘリコプター，こっちへ降りてくる。
　事象話題主語　論理客語

⑥⑪　　ほら，目を上げれば，星はまたたいている。
　論理客語　事象主題主語

⑦⑦　　花は咲いたが，あの人は帰らない。
　事象対比主語　事象対比主語

⑧⑬　　お茶は，じゃあ，私が入れます。
　主題客語　　選択主語

⑬⑯　　連れてく人がいないの？
　じゃあ，パーティーには 私を連れてって。
　主題客語　選択客語

第４章

構造描写

4.1　構造 → 描写 → 伝達 → 構造再現

判断を他者に伝達することを考えてみる。もし，その判断の形式をそのまま一挙に他者に伝達することができるのであれば，自分の中に形成された判断構造とまったく同じ判断構造が，そのまま他者の中にも再現できる。

しかし，私たちは判断構造を一挙に伝達する手段を持ち合わせていない。それで，次善の手段として，ことばを使用する。ことばを用いてそのつど判断構造のあり方を描写して，ことばの形で聞き手に伝える。聞き手はそのことばを受けて，自分の中に話者と同じ判断構造を再現して，話者の伝達内容を理解する。

よく知らない外国語の場合は，いくら相手のことばを受け入れても，判断構造を再現することができない。たとえ相手の言っていることをまったくきれいな発音で復唱できたとしても，理解には至らない。理解は，相手の判断構造が自己の中に再現できてはじめて達成されるのである。

ことばは時間的にも，空間的にも，線状に並ぶ１次元の構造しか持っていない。ところが，一方の判断は，現実世界に対応しており，いわば３次元，否，時間を考慮に入れれば４次元の構造をもっている。４次元のものを１次元のもので描写しようというのであるから，当然無理がある。

そのうえ，伝達はできるだけ経済的に行おうとする傾向がある。判断構造を構成している要素をすべて描写してことばにすることはむしろまれで，ふつうは自分の抱いている構造を相手が再構築するに足ると思われる，必要最小限の要素のみをことばで描写する。（極端な例では，一つの要素だけしか

描写しない「一語文」と呼ばれるものまである*1。）

次の図4-1は，この関係を簡単に示したものである。

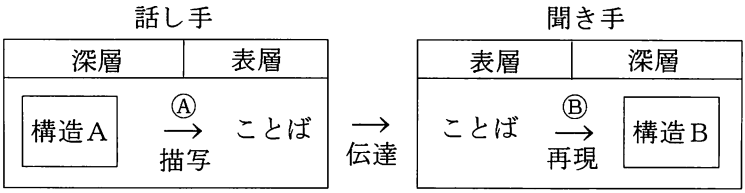


図4-1　構造のあり方をことばで伝える

図4-1の中のⒶのところでは「構造描写法」に従って文が生成される。次元の異なるものへと「変換」するのであるから，「構造描写法」は「構造変換法」と言ってもよい。Ⓑのところでは「構造再現法」に従って構造が再構築される。こちらは「構造逆変換法」と言ってもよい。

そして，それぞれの規則の適用の結果，構造Ａと構造Ｂが同一のものとなれば伝達は成功したことになる。描写・伝達される要素が少ないなど，構造が再現しにくい場合には，構造Ａと構造Ｂが同一のものとならないことがある。その場合にはさまざまな程度に誤解が生じたことになり，伝達はさまざまな程度に失敗したことになる。

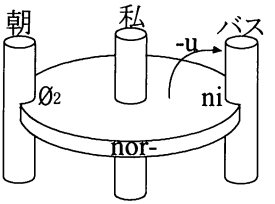
4.2　構造描写法（構造変換法）

いくつかある「構造描写法」のうち，ここでは３つのものについて述べる。

いまここに，「私$\emptyset_1$は朝$\emptyset_2$バスに乗る。」という文があり，その構造は図4-2 のようになっている。この一つの同じ構造から，構造描写法の違いにより，表層のさまざまな文が生成される。（形容属性の場合については，8.2，8.4③ 及び 9.1，9.2を参照。）

---

*1　俳句などでは，いくつかの要素を描写するだけで，大きな構造を伝えようとする。また，「おなかがすいた。」という判断を伝えるのに，深層に同時に発生した別の判断「もうお昼だ。」を使うことがあるように，一つの判断を伝えるのに，深層に共存する別の判断を用いることもある。このような場合には，聞き手の勘の良さ（深層にその構造と関連する他の構造を同時に構築する能力）が試される。



矢印は「nor-u バス」の -u を表示

図4-2

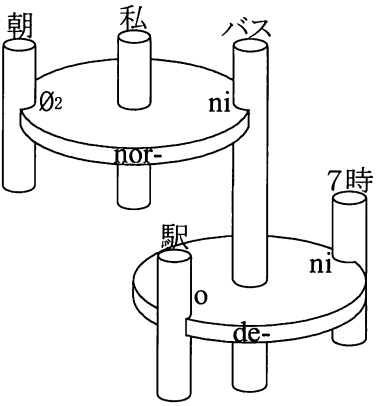


図4-3

1) **基本的な描写**……属性を文末に描写。ある構造の描写が完結したことを示す機能がある(基本描写詞 -(r)u / 形容詞の場合は -i)。

私Ø1は朝Ø2バスに nor-u 。　　朝Ø2，私Ø1はバスに nor-u 。

私Ø1，朝Ø2バスに nor-u 。　　朝Ø2は私Ø1，バスに nor-u 。

私が　朝Ø2バスに nor-u 。　　朝Ø2は私Ø1はバスに nor-u 。 等々

「は」を「も」などに換えることもできる。

また，**部分描写**もある。……　私Ø1，バス。　朝Ø2は　バス。　バス。

2) **実体修飾描写**……属性を実体の前に描写し，修飾させる(-(r)u / -i)。構造図では属性から実体に向かう**矢印**で表示(図4-2)。

① 私が朝Ø2 nor-u バス。

② 私がバスに nor-u 朝。

③ 朝Ø2バスに nor-u 私。

実体修飾描写の場合，①では「バス」が被修飾語となるので，論理的設定順序は「バス」が第一である。構造上で「バス」に接している「nor-u」が第二である。「私」の設定は最後，つまり，主語の設定が属性の設定より遅れる。このことから，主格はØ1格ではなく，が2格になる。②でも同様のことが言える。(「バス」を除く部分の構造が一体となって「バス」を修飾する

と考える場合は，主格をが$_1$格であるものとして説明することになる。）

図4-3 のような「複構造」を一文で描写するとなると，修飾描写が必須となる。たとえば次のような描写となる。

「朝Ø$_2$私が nor-u バス Ø$_1$は７時に駅を de-ru 。」

「朝Ø$_2$私Ø$_1$は７時に駅を de-ru バス に nor-u 。」

なお，包含実体を修飾する場合については 6.3 参照。

3) **実体つなぎ描写**……構造上の実体と実体を「の」でつなぐ描写法。

構造図では実体から実体に向かう**矢印**で表示する。

（「の」は「格」を示すものではない。）

たとえば次のような構造がある。（矢印は「手紙の返事」を示す。）

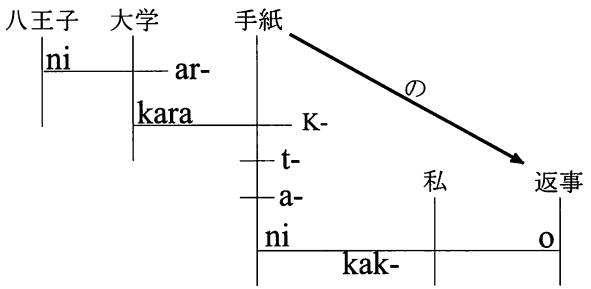


図４－４

このとき，次のように，ここにある要素すべてを描写して表層文を生成することはもちろん可能である。

私Ø$_1$は，八王子にある大学から来た(10.5)手紙に返事を書く。

しかし，ふつうは適当に「の」を用いて要領よく描写することが多い。

私Ø$_1$は，八王子の大学から来た手紙の返事を書く。

極端な場合，可能な限りのすべてを「の」でつなげてしまうこともある。

私Ø$_1$は，八王子の大学の手紙の返事を書く。

八王子の大学の手紙の私の返事。

この要領のよさ，「の」の頻繁な使用は日本語の特徴であるのだが，これ

は他言語母語話者の耳には奇異に聞こえている可能性が大きい*1。

この「の」による実体つなぎ描写は，経済的で便利である反面，誤解をも生みやすい。「政治家の息子」のように二義を生じるからである。下のどちらの構造からも「政治家の息子」が描写できる。聞き手は話し手の期待に反して，話し手のもつ構造とは異なる方の構造を構築してしまう恐れがある。

実体つなぎ描写の危険性を避けるために，2)の実体修飾描写を用いれば，一方は「政治家である息子」，他方は「息子をもつ政治家」と描写できる。

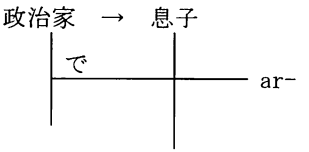


図4-5　政治家である息子

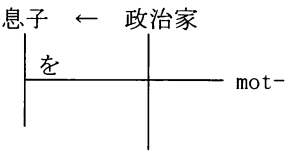


図4-6　息子をもつ政治家

多義性を回避するためには，「大学からの手紙」「大学への手紙」のように，格詞を実詞の後(「の」の前) に補うことが考えられる。上の例でいえば，「政治家での息子」，「政治家がの息子」のように。こうすれば，構造上の実体(名詞)の位置が明瞭になるので，再現に間違いが起こりにくくなる。

しかし，「がの」などというのは聞いたことがない。「をの」，「にの」なども同様である。このように格詞によっては自然言語にはない不自然な形になってしまう場合もある*2。とはいえ，構造のより確かな再現のためには助けとなる。

また，「の」は，たとえば

「私が朝Ø$_2$ nor-u バス」を

「私~~が~~の(朝Ø$_2$ nor-u)バス」とするように，

---

*1　たとえば韓国では，テレビ番組などで日本人の話す韓国語の特徴をユーモラスに描写するのに，「の」にあたる韓国語の単語を頻繁に使用するさまを強調するという。(韓国語では「の」を Ø にすることが多い。)

*2　「がの・をの・にの」がないのは，動詞にとって重要な格は示す必要がなかったからであろう。「が・を」両格の格詞は元来ゼロであった。p. 281コラム参照。

2)の実体修飾描写と組み合わせて使用することも多い。このような場合には「の」があたかも主語を表しているかのように見えることになる。

ところで，「の」を省略して，次のように複合語としてしまう場合もあることを一言添えておきたい。

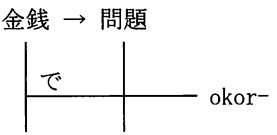


図4-7 金銭(で)の問題 → 金銭問題

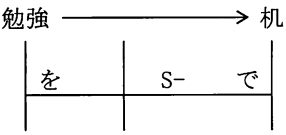


図4-8 勉強(を)の机 → 勉強机

◎**「の」**については第ⅩⅡ部において詳しく扱う。

学校文法の助動詞

この文法では学校文法の助動詞を次のように扱っている。

れる・られる	-(r)ar-e-	受動基
せる・させる	-(s)as-e-	使役基
る・らる	-(r)ar-	(受動)態詞
す・さす	-(s)as-	(使役)態詞
ない	-(a)na.k-	否定詞
ぬ(ん)	-(a)n- / -z-	否定詞
まい	-(u)-mai / -(ru)-mai	(複合)描写詞
う・よう	-(y)oo	描写詞
た	=t-Ø=a(r)-	完了基
たい	=ta.k-	下受け形容詞
ます	=mas-	助動詞
だ	-d=a(r)-	断定基
です	-de=s-	断定基
らしい	包含実詞「らし」＋形容辞「.k-」	
そうだ・ようだ	包含実詞「そう・よう」＋断定基「-d=a(r)-」	